参加者一覧 …… 02
連作欄 8首の連作 自由詠 …… 03
一首評 「そらよみ」 …… 15
テーマ詠欄 「初」 …… 16
新春クロスワードパズル …… 19
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 …… 20
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 …… 22
次回予告・編集後記 …… 23

うたそら

Utasora

2026.
January
No.30

うたそら　第３０号
発行：2026.01.01
編集・制作：千原こはぎ
@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/

うたそら

2026. January No.30

ご参加いただいたみなさん（五十音順）

青井まこと	@toko_toko_blue
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
新井きわ	@kiwawawa0420
井倉りつ	@uta_litz
石川順一	@Hitler57
宇祖田都子	@shinnsyutu2020
空虚 シガイ	@36aoRu1Re4K4AbR
泳二	@Ejshimada
織部ゆい	@yui_oribe
梶原一人	@MrDekopin
歌島孟	@Sinn1990
蟹大福	@fuki_yama_
がね	@amicus08
凋れ井戸	@kaionjijoe
河原こいし	@_little_word_
北谷雪	@kitaya_misomiso
橘高なつめ	@coconutkikko
久保田毒虫	@dokumu44
くろだたけし	@tkuro2016
高野蒔	@flour70percent
坂口栞	@wJS9f8NwfuJlVq3
桜さくら	@xi_zhen_ivUT
西鎮	@xHksbNR4wv1wj8M
寿司村マイク	@junki_poem
須藤純貴	
砂山ふうり	@saku_furui
青海波	@iFb77Wolcv87418
台風のめ	@ima_kaihi
多香子	
千原こはぎ	@kohagi_tw
鶴	@tsuru_labroom
十浦 圭	@urato_kei
中村成志	@nakam8
西淳子	@Jacky244Ray
袴田朱夏	@hakamada_shuka
畑 依裕	
薄荷。	@aie0himeco
非常口ドット	@hijyouguchi_dot
ひなお	
平本文	
廣珍堂	@Hirochin_dos
福山桃歌	@momoka_fukuyama
古井 朔	@PentasStar
坊 真由美	@mao_or_mana
真岡まな	@mskpompomfuwa23
まさけ	@kinakomooosan
間之口葵一	@MEATsachi
御糸さち	@miura_sinn
みうらしん	@kamin_plz
水上歌眠	@_nrkmnm
南の島	@myao_rrr
宮岡 りょう	@llama_miyashita
宮下一志	@mereumumai
六厩めれう	@NJq4oEvg5gIcRpu
森内詩紋	@yohei59756876
yohei	

計56名

たくさんのご参加ありがとうございます！

今号のうたそら

2025. November No.30

参加歌人様 …… 56名

連作欄 …… 45名

テーマ詠欄 …… 41名

一首評 …… 4名

リレーコラム 望遠鏡 奥武義さん

リレーエッセイ いちごいちえ 南野やぎざさん

ご寄稿いただきありがとうございました！

illustration: kohagi chihara

編集後記

あけましておめでとうございます。本年も短歌誌「うたそら」をどうぞよろしくお願いいたします。

どんなお正月をお迎えでしょうか。今号も、たくさんの素敵な歌をお寄せいただきました。こたつでみかんのお供に、おふとんでぬくぬくしながら、ゆっくりとお楽しみいただけたらうれしいです。

次号の〆切は2月末、発行は3月初旬です。5周年ということで、テーマ詠のお題は「5」。たくさんの素敵な作品をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ

ご感想はこちらまで！

Twitter（現X）ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」では Twitter（現X）でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

短歌募集

くわしくはこちらから

5周年!!

2025. No.31 〆切 '26 2/28(土) 24時

8首の連作	テーマ詠「5」1首	一首評「そらよみ」

2025. No.32 〆切 '26 4/30(木) 24時

8首の連作	テーマ詠「送」1首	一首評「そらよみ」

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください

http://kohagiuta.com/utasora/

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

張りつめる窓

新井きわ

放縦なきみに仕へて二十年われしか知らぬまはだかな貌
不器用にふたり歩いて今日までをきみのみが知るメタリックなわれ
狂ふ、狂る、狂るわたくし（夜遊びはしたことのなし）きみと踊るまで
蚊が吸へば狂ふ末路の血潮ですわたしの全部もつてけ、あげる
ほんたうは口・手・脚出し物壊すわれは怒りの阿修羅の相の
女性には手を上げないがモットーのきみの腕力、皿洗ひをり
職場にて箱庭療法受けし吾のほしいのはきみ、あるいはＧＯＤ
ふたひらの耳とほききみへ届かずに声キリキリと張りつめる窓

SaveAs

井倉りつ

戻れない場所まで離れたからわかる　やわらかかった　あたたかかった
冬なのに白い桜が咲いているみたいに見えて一回休み
枝先に白い実ポップコーンみたい　ナンキンハゼっていうんだってさ
そのように見えるってだけで実際はそうじゃないことたくさんあるね
「桜っぽい木」だけ見上げて「されたこと」ばっかり見てさ、足下の泥
どれだけの落ち葉踏みつけ粉々にしてきただろうここに来るまで
「こうだからこう」であなたを決めつけて標本にしてしまいたかった
思い出のあなたが小石を投げてくる　なんにもわかってなくてごめんね

リレーエッセイ 30

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　花
書き手　南野やぎざ

来世では夜明けの星に届くだろう芽吹かなかった朝顔の蔓

南野やぎざ

グリーンハンドというものがある。直訳すると「緑の手」。植物を枯らさずに上手に育てられる人のことである。群ようこの『パンとスープと猫日和』という小説に出てくる「しまちゃん」というキャラがグリーンハンドで、しおれかけた観葉植物を上手によみがえらせることができる。

正直、めちゃくちゃうらやましい。

わたしは、植物が育てられない女である。こういう人間を「ブラックハンド」というらしい。先日、上司からおちょこで育てられる赤松の種をもらった。芽すら出なかった。一緒にもらった同僚は芽が出たという。こういうことがままある。わたしの朝顔だけ咲かない。わたしの赤松だけ芽吹かない。最初の職場を退職したときにもらったドラセナ・マッサンゲアナ（幸福の木）を枯らし、お花屋さんに「育てやすいですよ～」と言われたアロマティカスも枯らし、いろいろな植物を枯らして生きてきた。

切り花なら大丈夫かな……と思ってたまに買う。先日、あまりにも枯れない花たちがいたので「この花いつまで咲くんだろう」と思いながら水を変えようとしたら花びらがばらばらと落ちた。いつのまにかドライフラワー化していた。とうとう自然とドライフラワーをつくれるほどのブラックハンドになってしまった……。

そんなわたしでも、比較的気楽に手を出せるのがヒヤシンスの水栽培である。年の瀬が近づいてきたら花屋に球根が並び始める。それをふたつ買って、スターバックスのフラペチーノのカップに入れる。なお、スターバックスのフラペチーノのカップは、半球のふたを逆さにしてストローを通す穴を少し切って広げるとヒヤシンスの水栽培にちょうどいいので、夏場に二回ほど飲んで手に入れておくのをここ数年の習慣にしている。ちなみに、ヒヤシンス栽培用のガラス製の花瓶も持っているのだが、それよりもスタバのフラペチーノのカップの方がヒヤシンスの育ちがよい気がするので（わたし調べ）ほんとうに、心の底からおすすめである。

球根は、数日の何の変化もない時期を経て、ある日急に根っこを伸ばし、「こいつ根っこ以外伸びないのでは？」と思い始めたころに芽吹き始め、ある日突然つぼみができる。そしてまた数日後、仕事から帰ってきて部屋の扉を開けると、さわやかな花の匂いとともに五分咲きのヒヤシンスが疲れ切ったわたしを迎えてくれる。ありがとうヒヤシンス。咲いてくれてありがとう。君はブラックハンドの希望である。

あ、球根をふたつ買うのは、どちらかが芽吹かない可能性がままあるからです。

ムクドリや植物

石川順一

ジャンパーのジッパー閉まり我々は銭湯へ行く闇は道連れ
種子が散り冬の向日葵咲いて居る柑橘類にミノムシが居る
朴の木にムクドリ占める鳴き声に電車は空を飛びそうもない
朴落葉道路に乾いた音立てる水路の暗渠化進まぬ街に
電線をムクドリ占める雨降ればマンション更地に急降下せよ
枝豆の鞘干乾びる速さかな記憶の風化と同じくらいに
枇杷の花忘れて居たよ冬の季語川の水減る冬に静もる
アメリカの地名を覚えて行く日々に銀河鉄道忘れてしまう

屋上獏部30

宇祖田都子

十二月　人体模型そっくりな柱状節理は生気を宿す
学校のシンボルだったイチョウの木葉を落としたら伐り倒された
「牛業」という読み方のわからない地名を書いて説明してる
屋上に飛び込み台ができたから確認のため先端に立つ
教室の窓を交互に塗りつぶし最後に月を残したら負け
一枚の空の写真を本当の空と向き合うように置いとく
水のないプールが見える水のないプールにぎりぎり収まるクジラ
屋上の空の写真に砕かれた鏡が混じり始める五限

広い夜

泳二

マグカップ私のための最強であたたかい御守りになってくれ
特別なことのない夜いつまでも雪へと変わらない雨の音
グラコロのＣＭひとり聞きながらふたつのことが気になっている
捨てるもの捨てられぬもの不自由は抱えて眠るにはちょうどいい
簡単に言葉を渡せたらいいのに明日の服を選ぶみたいに
頑張れと言ってみる遠くの町の頑張らなくていい人のため
知らない人の話に頷きながらまだ眠るには広すぎる夜
遠いなと思うこんなに歌ってもきみは笑ってるやっぱり遠いな

きみと僕のためのエチュード

梶原一人

凪ぐ僕を退屈そうに愛欲のヨット漂う早春の朝
アダージョできみを弾くから桃色のドレスで僕を待っててほしい
思い出を雨降るきみに返そうと雲になるまでマシュマロの僕
橋だって梯子にだってなれるから明日に向かって僕を架けてよ
まだ何も建ててないなと思いつつ見下ろす街の複雑な色
大晦日　母を処方し父を浴び僕は家族に着陸をする
山頂に雪ある山と無い山の隣りて同じ青空の下
ほんとうのことを言うね　僕たちは地平線の上に立っている

がら自分はお粥をすすっている。結句の八音からは、自分は今ここに居るんだという強い意志を感じます。

大洋丸の沈没について詳しく調べると、この時は軍人三四名、民間人一〇一〇名が乗船し、二四五〇トンの物資を積んでいました。最終的に八二七名が亡くなりますがそのほとんどが、占領した東南アジアの民政や行政のために送り出された多数の司政官や医者、教育者、石油精製施設や油井、アルミニウム精錬施設やセメント工場の建設に必要な各種作業員、そして橋本さんのような造船関係者、石油やボーキサイトの技術者など、その道のエキスパートの方々でした。ちなみに台湾でのダム建設で活躍した著名な水利技術者八田与一もこの事故で亡くなっています。南方資源の早期開発・獲得を目指していた日本にとって、あまりに大きな損失でした。

〇いったん帰京、ふたたび南方へ

海のそこにふかくしづみし暁紅、寒雲、白桃を惜しむ先生のまへに
娘らのかひな六本なびきあへりいきてかへりし家におぼれぬ

「東支那海よりかへりて」の一連から二首。一首目、詞書きに「斎藤茂吉先生に一首」とあります。歌に出てくる三冊の歌集の著者は斎藤茂吉。橋本さんは親交のあった茂吉の歌集を船旅へ持っていきましたが、沈む船から避難する際、荷物は置いていかなければなりません。長旅へ歌集を持っていきたいという気持ちは、歌人であれば誰しもが理解できるでしょう。二首目、東京の自宅へ無事に戻り、これは食卓か寝室でしょうか、三人の娘や家族との団らん。海に溺れず家に溺れる。すばらしい表現力です。

人と荷物とごつたごたのなかに人いきれ汗そのまの息を吸ひ吐く
息ぐるしく甲板にのぼり泥海のしぶきをあびてまた船艙にもぐる
人数にはるかに足らぬ筏の数をわれはひそかにかぞへ知りをり
命ひとつすつると思へばこころやすし救命胴衣をしづかに引きよす

「再び海を南して」の一連より四首。一九四二年七月十三日東京出発。広島県宇品から貨物船昭浦丸（六八〇〇総トン）に乗り、八月八日シンガポールへ上陸します。ここで少し昭浦丸について解説します。この船は戦前は北米からの木材輸入のために建造された貨物船です。従って大洋丸のような客船ではないので客室はありません。こうした貨物船で兵員や人員を運ぶ場合、貨物室の中に通称「カイコ棚」という、三段から四段のベッドをベニヤ板や木材で組み立て、むりやり居住区域を作ります。わずかな通風孔はありますが、冷暖房はもちろんありません。こんな船で赤道へ向かうわけですから、この時四十九歳の橋本さんにとっては辛い航海だったことが滲み出ています。一首目と二首目の解説は不要でしょう。

三首目、船のサイズにもよりますが千人から多い時で四千人が乗る輸送船内。明らかに足りない救命筏や救命艇の数。人知れず思う人命軽視の現実。四首目、敵潜水艦の襲撃。もう慣れてしまったか、有事に備え救命胴衣を引き寄せておく冷静さ。

この後橋本さんはボルネオ島やマレー半島各地の造船所をまわり、終戦まで技術指導にあたります。

〇前編のまとめ

このコラムのタイトルを「前編」としたのは、橋本さんの『ララン草房』を語る上で明らかに尺が足りなかったからです。後編をこのコラムで書ける日がくるのかわかりませんが、来たるべき時に備えてまた準備します。『ララン草房』は戦後の昭和三十年に出ていますが、兵士ではなく技術者としてロジスティクスの戦争を戦った橋本さんが遺した、貴重な体験が綴られています。戦後八十年。もっと歌壇で注目されるべき歌人です。エンジニアとして、歌人として、橋本さんを尊敬しています。

最後に、このコラムで用いた参考文献を記します。

橋本徳壽歌集『海峡』短歌新聞社＊黒瀬珂瀾『街角の歌』ふらんす堂＊松村正直評論集『樺太を訪れた歌人たち』ながらみ書房＊大内健二『輸送船入門』光人社ＮＦ文庫＊石井正紀『石油技術者たちの太平洋戦争』光人社ＮＦ文庫＊猪瀬直樹『昭和十六年夏の敗戦』中公文庫＊大内健一『特設艦船入門』光人社ＮＦ文庫＊大井篤『海上護衛戦』角川文庫

短歌リレーコラム 望遠鏡 30

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ 『ララン草房』から読み解く 大東亜戦争の実相（前編）

書き手 奥武義

○歌人橋本徳壽を知ったきっかけ

黒瀬珂瀾さんの著書でフランス堂から出ている『街角の歌』という短歌アンソロジーの中に、橋本さんの一首があったことがきっかけです。

ホーコンをうつ音きこゆこの音の愛（かな）しひびきを友知らざらむ
／橋本徳壽『海峡』

橋本さんは造船設計の権威として、国内や南洋各地で木造船の技術指導に尽力しました。歌集も多いですが、造船関係の資料も多く書いています。黒瀬さんの素晴らしい解説もそうですが、自分も工業高校を卒業して現場で技術職をやっているという事もあり、へーこんな歌人もいたんだ、とがぜん興味を持ちました。この一首は昭和十五年に出た『海峡』の中の「大湊市川造船所」という一連のうちの一首です。ホーコンとはマニラ麻を油につけたもので、甲板のすきまを埋めるのに用いられるそうです。僕らも職業柄、専門用語を多用するのでそういうプロ意識にも惹かれます。「友知らざらむ」は「（友人である）君には分からないだろう」というようなニュアンスでしょうか。そういうところもエンジニアらしいなと思います。

○大東亜戦争開戦「大洋丸」の悲劇

一九四一年十二月八日、日本はアメリカ、イギリス、オランダなど連合国との戦争に踏み切ります。

橋本さんの歌集『ララン草房』の冒頭、「念願」の一連から二首引きます。

全日本の海岸線よりひびき来る鎚の音こそ心とよむに
世にたちてひと筋と来し船つくりわれにわざあり活きよこのわざ

船匠として、エンジニアとしての誇りに満ちた歌です。冒頭の詞書きに「開戦とともに渡南のねがひおさへ難く各方面に運動す」とあります。資源確保のために行われたこの大東亜戦争は、軍人だけでは到底その目的を達することはできません。橋本さんのような技術者や行政官、経理などを担当する事務員など、多くの企業や民間人の協力が必要不可欠でした。一九三八年に成立、施行された国家総動員法により、徴兵とは別に民間人の徴用が可能になっていたため、橋本さんもその一環として南方へ動員されました。

一九四二年五月、橋本さんは客船大洋丸（一万四四五八総トン）に乗り込みます。この当時は南方各地で日本軍が快進撃を続けていた頃です。しかし五月八日、大洋丸は長崎県男女群島の南南西約一六〇キロの地点において米潜水艦の雷撃により沈没します。橋本さんは歌集に詞書きとして遭難当時の状況を細かく記しています。

ただよへる海しらじらとあけきつつよみがへるわが命を感ず
のぼる日に照らしださるる浪のうへただよふはは
た人かむくろか
海のうへに朝日子のぼる人の世のなべてむなしくよろこびもかなしみも
かたはらに重ねられたるいく人のむくろを見つつわれは粥すする

「海上日出」の一連から四首。橋本さんは午後八時頃海へ投げ出されボートに乗って漂流。翌九日の午前十時、駆逐艦に救助されたそうです。一首目、水平線から朝陽が昇ろうとする黎明。空が白んできた時、自分の命が助かったことをようやく実感する。二首目、辺りが明るくなるにつれて明らかになる惨状。三首目、助かった自分の命と、目の前に広がる惨状との差に空しさを抱く、複雑な感情。四首目、助けられた駆逐艦の甲板には引き上げられた遺体の山。それを見な

若冲になるワタシ

歌 島孟

ちっぽけな虫けらだって描いてやる、かぼそい声の美はきっとある
畜生のお魚だって描いてやる、生きるいのちの美はきっとある
貝たちは黙ってるけど、さまざまな色や形に美はきっとある
蝶にでもなれたらいいが僕は僕。きみも知らない美がきっとある
みんなとは離れてそっぽ向く鳥のあなたに見える美もきっとある
日に褪せるなんておそれずあるがまま笑まう花にも美はきっとある
お野菜もいのちがあってしおれゆく大根にさえ美はきっとある
鳥獣になってもいいの。どこにでも私はワタシの美がきっとある

飛沫

蟹大福

この河原にもはだかの許可がおりればいい　支配下の水じゃ足りないこの夏　より
地獄みやげ　メロンかスイカのでっかい果実　たのしいものですがぜひどうぞ
カリフォルニアブルーのアイコス　生命体　デジタルファイヤーの集団キャンプ
レモンサワー、今がずれてく、こぼれても、あとで今が拭くから気にしないで
借りっぱなしのヘミングウェイ　しおり代わりのレシートはエクレアふたつ
有限の渦に埋もれた靴裏のいつかの砂粒まだ居ていいよ
汗くさいまま喫茶店には行けないから　着替えたら、行かないから
おわらない歌をうたう　おわらない踊りをおどる　百年以内に

雪中行路

がね

まだ降らない雪は誰にも真っ白で助けてくれると信じていたい
人形の首を投げ合う昼休み　まだカマキリが生きてた頃の
飼育小屋脱出したり雪うさぎ　小学校まであと少しある
「柔道部物語」残る本棚のいつまでも埋まらない空白
凍晴がまっさらとある　初めての酸素だったらちょっとうれしい
雪落とす雪落とされる人類を揺らす地球の新陳代謝
電柱の脇を通れば異世界に行けたはずなのに行かなかった
冬の日を陽気の中に閉じ込めて春は悲しいくらい明るい

二人忘年会

涸れ井戸

忘年会的反省会をドルオタを夏に卒業した友と
天王寺谷町線で向かいつつ反省ごとのリストアップを
友だちは夏よりかなり痩せていて反省ごとを増やされている
天王寺トイレが多く街歩きしやすい穴場ハルカスもある
駅前のなか卯に入り混み混みの席で糖分摂取に励む
四天王寺までテクテク中国人急にいなくなったと友が
喫茶店入りここらは巣鴨似で落ち着いて話せると言い合う
反省は八件ぐらい簡潔にこなしてあとは古書屋めぐりを

透明な指

河原こいし

君のことだけを祈れば神さまはわたしの指を透明にした
透明な指でスマホを打っていることばに形はないものだから
手袋をはめた見えない手のひらの生命線は長かったはず
少しずつ透けていく日々Tシャツをめくれば鏡は壁をうつした
飴玉を飲みこんでみる胃袋の中はどうやら見えないらしい
少しずつ君を嫌いになりたくて「どうしたの？」って気にかけられる
どうしたの　たった五文字の問いかけで君への好きが消せないでいる
わたしなどいないせかいもそれなりにしあわせでいて　送信を押す

キッチン八景

北谷雪

もうばかなふりはわたしを救わない鍋のカラメルが強張ってゆく
ひと月の眠りを醒めてブランデーケーキにベリーの鉱脈は照る
菜箸に薄焼きたまごはひらめいて舟漕ぎの掬う月を想えり
小窓から夜をご覧な　海月のごとボウルに浮かぶ干し椎茸よ
手応えなく蒟蒻に刃を走らせる今年は誰を傷つけたろう
（秘密は固く守られたまま）亡き祖母と対話するような母の黒豆
白味噌はやわくほどけて眩しさのない幸福がふたりの椀に
あの店のポテサラのごとまだ可能性であなたを驚かせたい

アドベントカレンダー

橘高なつめ

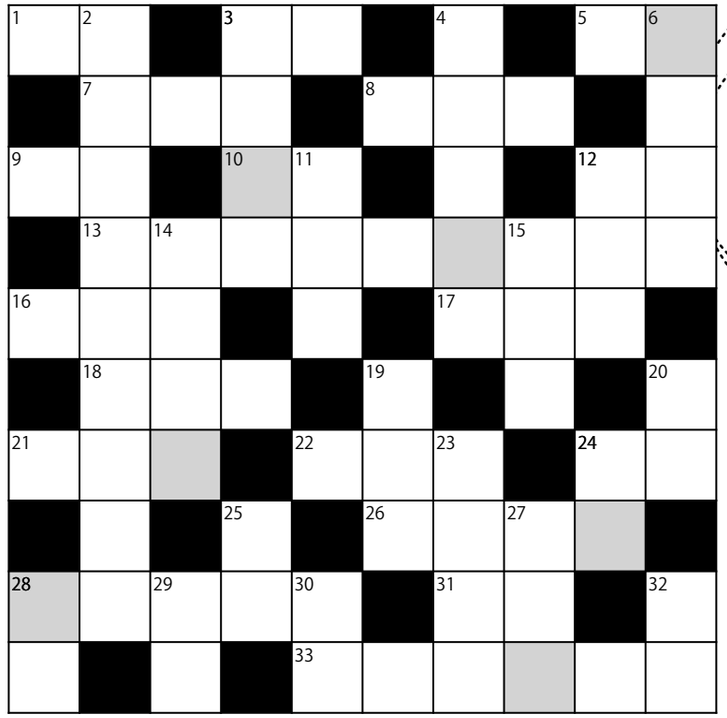
例年は母から届くアドベントカレンダーをポチる自分の指で
クリスマスキャロルを歌う教会で風にふるえる木の葉のように
金色に染まる夕方いっせいに揺れる綿雲みたいな野原
夕焼けが栞のように貼りついたドアを開けずにしばし佇む
ほうき星になって走ったママチャリが乗り捨てられた冬の公園
新月のような魚が光っては消えるふたりを映す水槽
日めくりを一気に剥がす思い出は多ければ多いほど寂しい
来年の抱負を言おう腕組みをしている鬼を笑わせたくて

わたくしりつ

久保田毒虫

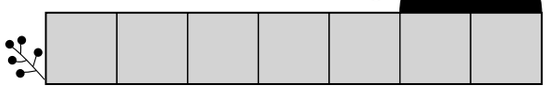
夜なんてわたくしだけと思ってたわたくしのみに来るのであると
夜なんてわたくしだけと思ってたわたくしだけが視野が狭いと
夜なんてわたくしだけと思ってたわたくしだけが暗いのだとね
夜なんてわたくしだけと思ってたわたくしだけが闇の中だと
そんなこと他の誰でもありました誰しも誰も暗闇の中
そんなこと他の誰でもありました誰しも誰も心閉ざして
そんなこと他の誰でもありました誰しも誰も戸惑う明日
そんなこと他の誰でもありました明るくなれば逆に見えない

ほっとひといき クロスワード 新春



色付きマスの文字を並べ替えてことばを作ってね

こたえ



タテのかぎ

2　生命工学。生命・生体を工学的に扱う技術。
3　新しい型・形式
4　黙ることが答えることになる夜のコイン○○○○○の地平線　／鈴木晴香
6　「２０２６年」「令和８年」
11　「この味がいいね」と君が言ったから七月○○○はサラダ記念日　／俵万智
12　３月
14　最もすぐれているもの
15　ツボを押して血行を盛んにする療法
19　注意深く考え思うこと。思いめぐらした考え。
20　沈殿物・不純物などをこすのに使う紙
23　初詣に行ったら引きたい
24　天つ風　雲の通ひ路　○○とぢよ　をとめの姿　しばしとどめむ　／僧正遍昭
25　鍵
27　信じすぎること。実際以上に高く評価すること。
28　なな、セブン。
29　たっぷりと君に抱かれているようなグリンのセーター着て○○になる　／俵万智
30　アメリカ・カナダなどのお金の単位
32　1000 の 10 倍

ヨコのかぎ

1　青魚。マ○○、ゴマ○○、タイセイヨウ○○。
3　雪の色。罪の容疑がないこと。
5　代表作は「睡蓮」。
7　夕焼けに○○○モールが染まっててちょっと方舟みたいに見えた　／岡野大嗣
8　トレンチ、チェスター、ダッフル、P…
9　○○まじりの風にドーナツの粉をはらう　季節の上前をはねて生きてく　／宇都宮敦
10　チューイン○○
12　トンボの幼虫
13　体温が低い症状
16　地球上で、水でおおわれていない部分
17　体調。機械などの調子。「体の○○○が悪い」
18　野生の薔薇
21　丸くて甘い果物。○○○パン、○○○ソーダ。
22　三人組。三重奏。三重唱。
24　「思い当たる○○がある」
26　読むこと、書くこと
28　海産食品の総称
31　髪を梳くもの
33　霊長類の中で最も進化したもの。

枕詞を使って八首

くろだたけし

あかねさす日射しに心ゆるませて恋をしたとて蝶はまぼろし
隠り沼の下着売り場の華やぎもめくってゆけば税務署がある
玉の緒の乱れた風が吹く道もふらふらせずにおとなは帰る
ひさかたの月をわたしが見あげれば月もわたしを見あげてくれる
ちはやぶる神のことばはあどけなくおまえも戦争で死ねと言う
白妙の衣はすべて部屋干しのワンルームへと深夜の帰宅
空蝉の命を持たぬ抱きまくらに無言でかけるスリーパーホールド
ぬばたまの夜の冥さに沈むとき羽を持たない僕たちよ翔べ

白色光

高野蒔

透明なダイヤモンドのなかに建つ異国の駅を光は満たす
白銅を数枚渡す指先の力を抜けばふれる手のひら
昔むかし知らない人がつけた傷なのにあなたはごめんねと言う
傷口に生まれる白馬　階段を翡翠の空に浮かべてごらん
音のない音を聴くときしんしんと雪の白さは心に積もる
花束の予約を終えて帰るころ傘に明るく雪の降る音
重嬰を抱えて降りた谷底の白鍵としてあなたに出会う
枯れ芝にちりばめられた霜の粒ひとつひとつに燃えている虹

長い助走

坂口栞

終電の長い助走をあやす夜　泣き止まない風消え去りたいよ
線路には切り替えがない信号の変わる色には意味が見えない
風景が見知らぬものに知らぬ間に変わっているもう後がないのに
行き先を知りたい明けない夜はない止まない雨はない風が鳴る
いまここは発展途上と言い聞かすこんなところで止まりたくない
屋根並ぶイルミネーション引き千切るトナカイの目に涙が刺さる
長い助走ひとりよがりを撒き散らし最後まで朝を知らないままで
脳と腹の闇では火花が散る影も光も生まないほどにかすかに

師走

桜さくら

ロビーにも雪の香のして誰となくツリーに灯す来る年の夢
アスピリンスノーの朝をもう一度　滴るような真紅のウェアで
大人にはピザを届けむピザーラのサンタは街をバイクで駆ける
ぼんやりと出会いし頃を思いつつ貼る年賀状じまいのシール
三時間少女はグミとゲーム機と全車指定の「のぞみ」に座る
超満員のファンに応えるライブなり新アルバムの勢いやまず
大阪のランチの列に弾かれて大階段にクレープを食む
おだやかに年を越したしごろごろの術めくこたつにスマホを閉じて

テーマ詠「初」

AIの初音をしばし待つてゐるウグイス、ヒバリ、スズメにカラス　◆廣珍堂
めくるめくきみがわたしの初景色いまもたしかにまんなかにいる　◆福山桃歌
初めから名もなきペルソナいたずらにいつまでもいつまでもジェーンドゥ　◆古井　朔
舞い落ちる初めての雪見る君の目に北極星光る冬　◆真岡まな
白鶴と初亀抱え曽祖父があと一万年も生きそうに呑む　◆まさけ
初恋は遠い空へと消えました大気圏外漂っている　◆間之口葵一
ポイントは全部ためてるいつの日か生まれて初めて死ぬ日のために　◆御糸さち
「初売りは？」「『いつもの』だよ」と笑い合い珈琲店の年は暮れゆく　◆水上歌眠
仕事始め（スペース）初め　カレンダー誰も見ないよわたしが見るよ　◆南の島
初雪に心弾ませたあの日には戻れず霜を踏み潰し行く　◆宮岡 りょう
これからの花束として初売りの街でいくつか選ぶネクタイ　◆宮下一志
サクラサキ君の寝グセが目立つ頃かなうといいなこの初恋も　◆森内詩紋
当初からプログラミングされている生き方ですね、信じています　◆yohei

ツナマヨ

西鎮

宝石の国を読了していないぼくと冷たい帰路をゆくひと
好きな映画言いあう夜にある匂いもうすぐ潮のみちる入り江の
ちっぽけなヨド物置が胸にいてときどき扉を軋ませている
やや月が傲慢すぎる夜だからきみと二本の樹でいた路上
ツナマヨのおにぎりさえも美しく剥げないぼくの手のひらへ雪
朝の雪はもう融けていて、懐かしい、うつむくみたいなうなずきだって
不正義にほとんどちかい雨が来て、わびすけ路上に咲いたみたいに
冬の午後へ薄闇さらり訪れてあなたの長い髪おもいだす

S（UNAYAMA）F　恙（つつが）なきや

砂山ふうり

秋空よ澄めよわたしも最果ての見知らぬ人の最果てになる
エイリアンみたいな蘭に睨まれておけいはんから京都に入る
パスワード忘れて其処に飛べぬ日もいつもと同じ私なんです
おれの鶏おれの炒飯コールされゴングのように中華鍋鳴る
春風の春一番のつっぱりが派出所前の自転車倒す
あふれ来る菜の花は目にながれ込みのどの奥まで輝いている
やわらかい機械のことを思うときバラした時間が海へと還る
端末を胸にあてればアンテナがぽとりぽとりとあなたを零す

発芽

青海波

海底を追い出された深緑が 太古の恨みを実らす林檎
崇められ吉兆を司る宿り木の 犠牲になった桜花の嵐
アイビー眠り羊を数えてて 明日が来ないやさしいお呪い
花を食む美味しいとかじゃないけれど あなたが夢を見ている間は
本当に欲しいわけでないおまけでしょう 君にとって眠らせた種子
いつの間に埋め込まれた花の種子 若人が盛りの牽牛花
帰り道将来を話す三人の 外れにいる私 夕顔
16時 斜陽が種をばら蒔いて 発芽しかけの西向きの部屋

大統領と和尚さん

台風のめ

目ん玉がひっくりかえるゲオスミン吸って吸って吸って犬かき
つけまつげ芋虫だから捨てちゃダメって大統領はささやいている
マイホームほしいくせしてこの夜も僕ってばナンパばかりしている
チューしてよさみしいんだよ〈ホシヲミテ〉なんで空ばっか見てるの君は
知っている?君もそうだね、講演会は豆本読む時間だ
商店街どこもかしこもフリース宗派新たなヒッピー時代の予感
おふとんにカフェオレこぼし泣いている助けてよって和尚さん呼ぶ
ぐわんぐわん嗚呼きもちがいい天国はｗｗｗの向こう今生が好き

出会った日電撃走る思い出が今も隣でピカピカ光る　◆ 須藤純貴
初陣はあの日雷火が心の臓焦がされた君の瞳によって　◆ 青海波
「初めて」の枕詞をくりかえし君の前だけ嘘をかさねる　◆ 台風のめ
日曜をとくべつな日曜にする　ここは初めて見るパン屋さん　◆ 千原こはぎ
初音ミク　僕には君しかいないけど　幾人も居る君のマスター　◆ 鶴
初めてはなんでもすてき真夜中の横断歩道指を絡めて　◆ 十浦　圭
初めての立ち上がれずにいた朝のふるえる目蓋を押さえる指の　◆ 中村成志
初キスは英和辞典のＳＥＸと蛍光ペンがふれるみたいに　◆ 西淳子
ひとがまだこわくてこわいはじめてのはじめましてをまちがえたのか　◆ 袴田朱夏
スーパーでお母さんって呼ばれてるあなたと初対面の顔する　◆ 畑　依裕
初雪の夜の匂いがたちこめる薄荷糖をきりりと噛めば　◆ 薄荷。
介護士は仕事納めの一秒後仕事始めだ夜勤が長い　◆ 非常口ドット
「初日の出犬を引きつれ散歩から」賀状に添える俳句ができた　◆ ひなお
初めてのブラックコーヒー苦いけどつらい記憶は吹き飛んでゆく　◆ 平本文

寒い朝

多香子

午年の暦の上の馬の絵がのんびり草食むうらやましけれ
目を凝らしメジロこぬかと待つ我の目の前を椿ぽとりと落ちぬ
冬寒むの庭のフェンスに雀来て何かおくれとずらりと十羽
あの人は非常口から駈けて行き帰ってこない猫のような人
奇術師の服の中では鳩たちが出番を争そいつつき合ってる
雪が降りあなたを思うと熱っぽいそれゆえ明日の仕事は中止
あのひとの残した折り鶴お守りにまだ春遠い町に居ります
白菊をたんと植えよういつの日か裏戸を開けてあなたは帰る

Stillness

千原こはぎ

「またあした」夜更けいつものひとことで世界に置いていかれたここち
不自由なひとはやさしくてつめたい　ひとり闇を見ている
ラジオから聞こえる声はあたたかでもう壊れても許してほしい
永遠に迎えることのない朝を思うねむりにおちてゆくまで
誰ひとり会わずに終わる十二月　ぜんぶひっくり返ればいいよ
仕事だけしてれば存在意義はある　あるのか　あるか　夜が長いな
一文字のあなたも感じないままに日が変わり数字だけが増えた
あたらしい冬になれ「待ち人来る」のおみくじを荒々しく括る

ひび

十浦　圭

今日もまた「好きな私」であるように祈りのように輝くネイル
さびしさには色がある今日は水色が「もしもし」やさしく背中を撫でる
飛ぶのにはまだ足りなくて靴下を脱ぎ捨てる　まだ足りないらしい
逢瀬にはすこし足りないわたしたち火傷の跡だけそっくりでした
口癖があかるいものであればいい　願いをこめて伏せる手鏡
分かり合えないと知りつつうなずけば横たわる川の水音遠く
紙舟にぴったりの便箋でしたいつか海までゆきますように
皿の上を滑りゆく泡きらめいて春　午後　ひとり　はるかな吐息

ダブルドリブル

中村成志

どんぐりをみんなが踏んで陽の中にぽりぽり白くなりゆく歩道
目分量お好み少々ひとつまみ嵐の夜の和風パエリア
違う箇所を探ってゆこう金棒を肉へ幾度もしずかに沈め
どこからがダブルドリブルまた急に冷え込み明日は北風らしい
包丁の両側に付くアボカドの果肉くらいの量のやましさ
どこまでも平らの果てに陽が沈む東海道線十四号車
光源を少し絞ってくれないかその脇に居る影が見えない
ジャングルジムにクリームチーズを押し込んで枝分かれする果ての月光

テーマ詠「初」

ぼくたちのひかりはついにえきたいになってじんるいほかんけいかく　◆青井まこと
初めての春夏秋冬　目に映る色を増やしてくれる町にて　◆麻倉ゆえ
自転車に乗れし日、母は初潮こし（祝ひのやうに）赤飯炊きて　◆新井きわ
「お好きな席どうぞ」と言われはじめてのことなのでまだ好きも嫌いも　◆井倉りつ
初トライ迷路がいつも輝いてシンジケートを誤解して居る　◆石川順一
初めての朝を早起きしちゃったらマクドナルドへ行くしかないね　◆宇祖田都子
前方のスペーシアに若葉マーク　破魔矢を買うことを思い出す　◆空虚 シガイ
こんな歌きらいだろうか多分今日どこかの町に初雪が降る　◆泳二
始まりの人が残した初めての生き方を知り今日も生きてる　◆織部ゆい
おやたちの声と海鳴りかぞえつつ初盆に焚く浜の送り火　◆歌島孟
だまし舟初めて折った日は確か元旦だった妙な確信　◆涸れ井戸
初霜を溶かして犬が肉球のマークを落ち葉に捺してゆく朝　◆河原こいし
初日の出ではなく初夕暮れですと一応添えて海の写真を　◆北谷雪
廃ビルの躯体をはじめて濡らすのが春のやわらかな雨だったから　◆西鎮

#なぞだけ

西淳子

リセットの数だけ栞　猫に似た急性アルコール中毒だ
ティラミスを買った記念に自販機とドライブスルーのコントを見ます
寝込んだら狸が二匹もらえるの知らなかったよ、光るシャンプー
コングラチュレーションばかり送るけどオートロックを知らないでしょう？
模造紙にスマホ依存症　あの痛みは無駄遣いになってもいいよ
スランプの数だけコインランドリーを建てていたのがバレて、屋上
寝るだけで時給が5円！そのゴリラ、たぶん誤作動だから真似して！
できるから。電波時計に挨拶をして寝る、キスは駐車場でも

星八首

袴田朱夏

終わりだよ　わたしにふれることのない言葉はまるで星のようです
目だったり空気だったりするけれど星にうるんでいてほしかった
ただひとつさわれる星のうすかわにいつかこの身をおあずけします
ふたをしたこころのなかでいつまでも星を鳴らしているアルペジオ
燃えてこそわたしの旗とおもうから星になるまで燃やしてほしい
加速するそのアプリなら星々は目の不自由な人に届くの？
いまやっと星がみつかる東京は朝がいちばん暗いんですね
上善の水でつるつる磨きます自分で光れないこの星を

きっと寂しい

薄荷。

淡黄のフレネルレンズ灯台のひかりは今日も呼吸している
寂しさをラムネの瓶に取りわけて星のひかりに透かして見れば
ながれぼし軌道をなぞれば指先に宿るひかりのほの温かさ
初雪のかたちを耳はおぼえている（ガラスのピアスはすこし悲しい）
雪の夜をクラゲのように漂って僕らはみんなきっと寂しい
幽霊の抜け殻だろう道端に転がっているちいさな手袋
星たちの吐息に空は磨かれて真夜中の風はしんと冷たい
薄闇の部屋にむかってただいまを言う薄闇は答えてくれる

広島風平成レトロ

非常口ドット

年明けは家族で旗を振りながら男子駅伝応援してた
プカプカと池のクラゲを眺めてた小己斐明神は海へ繋がる
鈴が峰団地の裏のコンクリの坂を滑って早さを競う
兄さんの青いキャップに憧れた五日市スイミングスクールで
宮島の水族館でスナメリとペンギンたちの仲間になれた
生活に路面電車は溶けていてしょうたの家に行く足だった
満点のご褒美に呉ポートピアランドのシンボル大観覧車へ
トンネルでエイのお腹の下歩くアクア・アベニューどこまで続く

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から気になった一首をとりあげて200文字くらいで語る一首評のコーナーです

大人にはカラスの声が聞こえないもうブランコを漕ぐのをやめる

河岸景都

一首評　中村成志

いくつかの読みが考えられる。
・主人公はブランコの軋みでカラスの鳴き声を模しているが、大人が気付かないことに驚いている。
・目の前にカラスがいるのに、ブランコを漕ぐ自分は大人なので鳴き声が聞こえない。
・上句と下句は別の景。
・カラス本人（？）がブランコを漕いでいる。
他にもありそうだが、いずれにせよどの場合も、カラスの鳴き声とそれに似たブランコの軋み音が、通奏低音となっている。

見えすぎていいことなんてあるかしら裸眼のバスルームはやわらかい

小藤舟

一首評　西鎮

帰宅後の入浴を軸に詠われた一連「おかえり」の五首目。作中主体は一人バスルームで、日々への鬱屈やある人物への慕情を〈吠え〉るように吐き出しているようだ。裸眼のバスルームが〈やわらかい〉のは、おそらくは視力の問題に留まっておらず、一人きりの密閉空間における解放感があるからであろう。視覚を入り口に、こうした「狭いにも関わらず開放的」という複雑な心象をさらりと定型に乗せる巧みさに惹かれた。

使ったら負けだと思う耳かきの尻についてるきれいな綿毛

六厩めれう

一首評　寿司村マイク

「先勝先負」というタイトルでの3首目です。
まず3句から結句まで19音丸々使って名詞を説明しているのが面白い。梵天（ぼんてん）と呼ばれるそうです。また消しゴムつきのシャーペンなどでも同様ですが、大したものでもないのに使うのは躊躇われる。汚さずにいたい。そんな心理は確かにあります。連作全体が、大安でも仏滅でもない日常の日々に対峙しての受動・能動を飄々とした文体で描いています。

赤い実がはじけたら恋　もんしろちょう
逃がしたら夏　教室の風

福山桃歌

一首評　西淳子

「赤い実がはじけたら恋」のモチーフは、たぶん小学生の教科書に昔、載っていた小説『赤い実はじけた』だと思われる。もんしろちょうは春のイメージがあるので、それを逃がしたら夏というのも分かる。「教室の風」は赤い実がはじけたときに生じた風やもんしろちょうが羽ばたいたときに生じた風も表しているのだろうか？「恋」、「夏」、「風」と三連続の体言止めや「赤い実」と「もんしろちょう」での赤白の対比も良くて好きです。

「そらよみ」一首評募集

前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、その歌について200文字以内でお書きください。お一人につき一首まで。
ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。
公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような投稿は掲載できませんのでご注意ください。

ご投稿はこちらの投稿フォームから！

迷図

六厩めれう

南天の実の減り方はゆるやかで鳥には鳥の事情はありぬ
食欲の十にふたつはホンモノであとはニセモノだという暗示
興味なしボタンを押せばおすすめに新たな興味なしはあらわる
寅さんの主役を満男にするように親の出番を減らしてゆきぬ
宅配の人が荷物に付けてった匂いがよくて少し悔しい
なくなった猫とおんなじ色をした蝶がまとわりついて離れぬ
むき出しの臓器に着せる服なくて裸眼のままで人混みに出る
人肌でしかないカイロは剥がされて鉄本来の冷えへ戻りぬ

かなしいことは君に言えない

森内詩紋

雨の中一番長く立っている　雪だるまならとけられたのに
あざといね神様でさえ笑うほど軽い口調で誘うだなんて
あきらめて光を待って深呼吸どうせこの先独り行くんだ
どっかーん！（何も見えない）ああ、そうか破裂したのか僕の心臓
伝書鳩飛ビカエルトモ留守ノ部屋　かなしいことは君に言えない
両腕で抱き止められて花束のごと匂いけり赤いくちびる
セーターは此処には無くて着る人を選ぶ服だけ散らかっていて
ふりかえり君と出会ったトンネルを戻れもせずに悔やむばかりだ

うつくし、

yohei

たとえば　は　雨粒ひとつ込み上げて流れるまでの幹の膨らみ
せせらぎを背骨に賭して沈めたら檸檬畑の檸檬っぽい色
ニューデイズ　それは奇跡のことですか満員電車を軽くみている
やがて昼　ありとあらゆることをして眩しい技術はふんだんにある
ベリーゼリー人はひとつぶ口の価値かたちを封じ込めてください
震えているの　では　ない　のかい内面を描写の意味を中心部より
ああ人はうつくしくして　います今　ゆうぐれの去りぎわさらにいい
雨が雪　雪が私に変わるとき　傘はゆっくりたたむものです

自由律短歌　冬

ひなお

コーヒーの湯気に面影がよみがえる　ああそのような時もあり
ベンチにいれば冬の日があたたかい　セーターの焦げる匂い
朝早く散歩に出ると月が割れた鏡のように浮かんでいる
寝転んで本棚を見ていればふと目に入る「ツァラトゥストラ」
道路の銀杏枯れ葉が車に轢かれるたびにクズクズとなる
床に寝転んで本を読んでいれば窓越しの冬日が暖かい
「中尾町」が「中尾」に変えられた地域の繋がりの分断疑惑
鋪道の上を滑っていく枯れ葉は重なり合って小さな山になる

君

平本文

思い切り駆け抜けた日々ぼくたちの恋はもう終わってしまったけれど
ぼくたちは思い出のままでいようそう語り合った
友達となった君だけど心の中でどこか淋しく
付き合ってくれないかと言われた日とても遠く感じてしまう
君と話せたそれだけでぼくの心は温かくなる
君の横顔見ていると君ともっと話したくなる
君と手をつないだ日　忘れない
臆病な私に君は一緒に行こうと言ってくれたね

もう無理

廣珍堂

寺町の角にずっと残っているレモンの影が吹き出す猛暑
ビフィズス菌が横行結腸に張り付きみんなの下痢を抑える急行
セザンヌがアップルウォッチを身に着けて赤を困った現実とする
どんどんと小さく少なくなる菓子を落としてしまい見つけられない
空腹で眠れぬらしい熊のニュース、寝る前に食うカップ麺良し
スカートの下にジャージを穿く生徒の冷えを心配する高齢者
情けない、うっすらそんな気もするね噂の沼に沈む瞬間
ＡＩが嘘もモザイクも修復すウソのホントのバカボンループ

実質最前

福山桃歌

まっすぐに刺される場所に席があり今夜わたしは死んじゃうらしい
２階席きみの目線が届くって信じれるほど実質最前
もうここに閉じ込められてしまいたい爆音が降る夜に溺れる
目の前のきみに決して届かないのに叫んでるきみの名前を
金銀の特効飛んでモニターにきみの笑顔が映って　終焉
わたしだけにきみが歌っているような嬉しい楽しいまぼろしでした
盛大に誤解されたい朝帰り　雨上がり　朝焼けが滲んで
生活に戻れば帰る場所がありそれでもきみを愛していたい

トーキョー

古井　朔

トーキョーが東京だった頃この星は地球と呼ばれヒト族がいた
やめるなら今が潮時いつもいつもそう囁いてうつむくトーキョー
ペルソナはもういらないと突きつけてあなたが去った最後のトーキョー
唱えれば帰れるのかなトーキョーにジャイロコンパス壊れて彷徨う
トーキョーの裂け目にかかる虚ろな橋を渡ればみえる明日の終わり
ニンゲンはもういらないと、明滅するヨルを抱えてトーキョーは
暮れなずむトーキョーのソラあやふくてワタシもそろそろ限界ですね
キュビズムのトーキョーいつしか嗄(しわが)れて世界の無意識むさぼる晩鴉(ばんあ)

どいてくれへん

坊　真由美

Summer songs, 撥水加工の口紅のような恋へと落ちてしまえば
平日のバニラアイスを味わってそして週末ラムレーズン派
左手で分け目を指して男（初老グレーの上着）が割り込んで来る
梅田から京橋までの数分でお尻のいくつ撫でられただろう
ああ君は宝石すぎる人だからどんぶら孤独の桃になります
死へ一歩わたしの身体を進めてる雨の車内のもわんもわんもわん
失礼なおっちゃんだなぁわが尻が降りたがるのにどいてくれへん
隣からいつもの息が聞こえても　星降る夜は離れておくね

平成はベスト

まさけ

美しい虹をみていた　L'Arc ～ en ～ Ciel が全部だったあの頃
突然の風に吹かれてよろめいて落ちた FIELD OF VIEW の沼
ホームラン打つ勢いで友がした渡瀬マキ似の子への告白
弟は急にトランク一つだけ持って都会へ出ていったまま
励ましてくれてた人ももういなくひとり聴いてる ZARD のベスト
あの腕に発電機とかつけたなら GLAY のライブはサステナブルだ
出来るならマーク・パンサーの立ち位置で定年後にも雇用されたい
ピーヒャラピーヒャラパッパパラパ　このノリで生きてみたいという望み

裏技もある

御糸さち

人生のネタバレですが大抵のことは思ったようにいかない
バランスがバランバランで立てないよ　カラコン越しでもモノクロの街
黒猫に余計な意味を付け足して人間たちの影は連なる
メロスではないのにいつも激怒する　メロスではないから走らない
ラバーマスコットはすぐに汚れるし最初から買わないのが愛さ
普通とか普通じゃないとか白線で分けられている　分けられている？
選ぶことは何かを選ばないことで犬ぞりの跡が消えるまで見る
勇者でもモブにスタックしてしまう夜はあるだろ　マルチシナリオ

夢で見た全校集会

みうらしん

体育館に集う頭の数々を癖毛・癖毛でない、に仕分ける
想像に椅子を持ちこむ読めないと思うと本が読みたくなって
集会はスローモーション　ムニエルにゆっくりふりかかる塩の量
夢を見る軌道で埃が落ちていく　まばたきで床の色は変わった
海水を煮ているようなもうすでに記憶の中の景色のような
右足側がややうっとりとぬるい床何かを我慢しているようだ
横列のひとりが抜けて隣へとあなたがならぶ　耳のなかでも
水中のように重たい耳になる海をおぼえるまでが教育

ある展望塔の閉鎖

水上歌眠

高速なエレベーターが高速なエスカレーターじゃなくて良かった
距離感にわずかに嘘のあることが遠くの山を青く見せるの
あまねく、とゆっくり言えば戸のように『ね』の左には縦棒がある
あのビルで映画を観たと指差してあなたの珊瑚礁の人影
高いことは遠いことだね　かみさまが人を忘れる仕組みがわかる
永遠の愛があったらどんなにか　雪の視点で見る遊園地
百年後また会うという約束を閉鎖の決まった展望塔で
忘れられた展望塔も雪の日はだれかの夢を見るのでしょうか

もくもく

南の島

今日もただ食べる可もなく不可もない焼きそばフォームローラー痛い
チャイは嫌い？好き！好きだと何回も言う
わたしだけは渡りきってから曲がる黒いところはワニがいるんだ
バーベキューソースとマヨの境目を曖昧にして君ともくもく
折れていることがわかると痛くなる病院なんて行くもんじゃない
僕の魔法瓶が並んだ助手席で初めて人に淹れた紅茶を
いただきますいつもコーヒーのあなたが淹れた紅茶はずっと熱いよ
光より言葉を尽くす空の色離れているから僕たちなんだ

冬の挨拶

宮下一志

面会を終へてふはつと軽くなる表情みたい冬の陽射しは
一輪のやうなからだを守るには追ひ風さへもあなどれなくて
前任の太きロープに繋がれて抱へきれないほど備忘録
だめな雪、だめぢやない雪この道を覆ふくらゐのプライドはある
年末の慌ただしさや目のまへを千鳥格子のタスクが通る
おほきなる牛乳瓶に注がれる直帰の夜のわづかな孤独
一年を仕舞ふ作業はらふそくを吹き消すときのいきほひに似る
あたたかな言葉がずつとあふれ出る年の終はりが冬でよかつた